

藤巻小水力発電跡地見学

(NPO 法人 会津みしま自然エネルギー研究会活動記録)

令和2年(2020年)10月17日(土)、あいにくの小雨模様であったが本会会員6名(小柴茂、二瓶辰右衛門、石川彰、五十嵐富一、小栗文夫、二瓶厚)で、福島県喜多方市山都町一ノ木字藤巻の小水力発電跡地見学を実施した。

石川、小栗、二瓶辰右衛門各氏の車に分乗し、9時に道の駅「みしま宿」を出発する。途中買い物などをして会津坂下町気多宮で国道49号から県道43号(会津坂下山都線)に入り、喜多方市立山都中学校を通過後、国道459号を相川まで進み、ここから県道383号を「山都温泉保養センターいいでのゆ」方面に向かう。「いいでのゆ」を通過し、一の戸川にそってさらに進む。紅葉にはまだ早いものの、葉のあちこちが少し色づき始めている。やがて川は、本川と九郎三郎沢に分かれる。このあたりは飯豊山のふもとに当たり山深い。道は本川に沿って進む。川の流れが美しい。川筋に沿う道なので急坂ではないがゆるゆると細い登り道が続く。この道は新稲荷峠を経て、飯豊山登山口でもある弥平四郎へ通ずるが、峠付近が崩れて現在は藤巻から先は不通である。本川と九郎三郎沢に分かれから約1km、突如開けた空間が現れ、藤巻に到着する。10時を少し回っていた。



藤巻集落

元は、木地師の作業場所として開けたらしいので一族集団ということになるのではなかろうか。名前を言わなければ区別がつかない。余談になるが、田舎の小さな集落では、姓より名前で呼び合うことが多い。姓の種類が少ないのも原因かとも思うが、互いに呼び合うのに、名前で呼び合う。子供のころからそうしているので、大人になってもその習慣は抜けない。筆者の住む地区でも、年上に対しては「〇〇あにい」とか「〇〇あんつあ」、「□□あね」と尊称を付けて名前を呼ぶ。姓で呼ぶ場合は、少しよそ行きなのである。

閑話休題 両小椋氏の案内で集落のすぐ傍を流れる本川沿いに作られた発電施設に向かう。そこに



(図1 本川付近の私有地に設置されたコンクリート水槽)

(図 2 水量調節部)



(図 3 水車外部滑車)



(図 4 滑車と発電機)



(図 5 発電機を見る)

半ば草に埋もれたコンクリート製の水槽が現れた (図 1)。水槽の底に水車への送水口がありそこに水量調整のガイドバーンと思しき構造物がある (図 2)。小椋区長の話では、手で開閉したそうである。水槽の外に水車軸から伸びた滑車 (図 3) があり、4 連の V リブドベルトで発電機に連結する (図 4)。発電機には「日立岡部鐵工所」の銘板が残っている。写真では見えないが、出力 3kw と表記されてある (図 5)。発電機の基盤はコンクリートの土台の上であり、土台の下は排水ドラフトになっている (図 6)。下まで入って行って見たが、藪で見遠しも足場も悪く途中までしか行けなかった。



(図 6 ドラフト)

取水は地区の傍を流れる「本川」という川に取水堰を作り、30~40m 導水して沈砂池を兼ねたと思われるコンクリート水槽に送る。その間の落差は数m程度と思われるが、開放水路なので有効落差にはならない。結局、有効落差は水槽の水面からドラフト下部の排水面まで 2m 位である。これで 3kw 出力となると、設備の効率を考慮しても、使用水量は 0.15~0.2m³/s と見積もることができる。これは本川の流れから判断してかなり多い量にも思える。小椋区長の話では

建設当時の本川の流量は現在よりかなり多かったそうである。時代が下って、山の木を皆伐した時には流量は激減したそうである。樹木が増えるにつれて流量も増したというから、まさに森林は山のダムであると言えるのではないかと。森林の適切管理は、水の適切管理につながるのである。

このような土地で、自家用ともいえる小水力発電事業が起こされた背景には、木地師が使うロクロを水車で回したという事実があるからではないだろうか。川の流れに水車を下ろし、その回転の動力を利用することは古今東西至る所にある。水車の力でロクロを回せるのなら発電機も動かせるはずだ。地の利を生かし、ないものは自分たちで作るという開拓者精神がそれをなさしめたのではないだろうか。

両小椋氏の話は、電気をめぐる当時の生活に及ぶ。この集落発電施設は地区住民の生活向上のために、住民の総意で自分たちの手で私有地に作られた。昭和 34 年（1959 年）に完成してから、東北電力の電力供給時までの数年間住民の手により管理運営されていた。多いときには 20 数戸あった地区の家々が、この発電所からの電気で明かりを灯し、ラジオやテレビを楽しむことができたという。時々明かりが暗くなるなど電圧は不安定だったようで、水車にからむ落ち葉の除去や水路整備など施設の維持管理には多くの苦労があったはずである。3kw という電力は、現在では 1 戸の住宅で消費してしまう程度の小規模電力だが、昭和 30 年代前半には各戸に 40w 程度の電球が 1、2 個ある程度であったからそれなりに賄うことができ、電気の恩恵を享受することができたのであろう。

ラジオはともかくも、テレビは東北電力の電力供給後になってからのものではないだろうか。この発電機ではテレビ受像機に対しては電力が不足するし、奥会津までテレビ電波が届くのは数年かかったはずだから。昭和 28 年（1953 年）のテレビ放送開始以降、昭和 34 年（1959 年）に現上皇・上皇后両陛下のご成婚や、昭和 39 年（1964 年）の東京オリンピックをきっかけにテレビの普及拡大は加速度的であったが、都市部はともかくも、農山村地区ではテレビ受像機が各戸にあるわけではなかった。

日本が高度経済成長時代を迎えて以降、生活の便利さを求めて人々は山を下り、都会へと集まった。そして、半世紀以上もの時間が経過した令和の今、藤巻に住所がある家は、3 軒（通年お住まいの家は、1 軒）となった。しかし、周囲の山々には人の営みに呼応して恵をもたらす大自然の息吹を感じることが出来た。

私たちは 1 時間余りの滞在ののち、両小椋氏に懇ろに感謝を申し上げ辞去した。

2020 年 10 月 26 日

文責 二瓶 厚（NPO 法人会津みしま自然エネルギー研究会）